

NKオンリーワン通信

VOL.27

発行：新潟北高等学校

23121527

平成 21 年度に県教育委員会
からオンリーワンスクール推進事業

研究開発校に指定されてから様々な取組を実施してきた。

以前にも紹介させていただいたが、「県立幼稚園と連携した取組」

と「大学と連携した取組」を二つの柱としながらのものであり、

その延長線上での小学校や中学校とを含めた地域との連携まで高めたいというコンセプトを持って臨んだ事業であったが、なかなか地域との連携まで高めることができず、担当としては大変申し訳ない気持ちでいっぱいである。今後は地域への働きかけを一層強化し、大形地区の唯一の高等学校として、その存在意義を広く皆さんにアピールしていきたいと考えている。そのためには、まず「開かれた学校」にしていくことが大切であり、今後の具体的取組が大きな鍵を握ることは間違いあるまい。

さて今号は、新潟県立大学のご理解とご協力を得て同大学で初の講義体験を実施した。参加した本校生徒は、3年生9名（いずれも保育・幼児教育系上級学校進学予定者）と2年生3名の計12名。特に3年生は、同事業の初年度からの生徒で、その動向が注目された。同事業の成果指標の1つとして、保育・幼児・初等教育上級学校への進学率10%を掲げてスタートし、平成20年度の0.5%→平成21年度6.3%→平成22年度10.8%と2年で達成し、今年度も10%を上回ることは確実と思われ、本校の今後の取組に示唆を与える結果となったのは喜ばしいことである。

県立大学での講義体験の巻～H23.12.14

当日、冬には似つかわしくない空冴え渡る絶好の日であった。「8時25分には点呼をとって出発するよ」と事前に指導しておいたものの、遅刻してこないか？内心は心配であった。しかし、そんな心配は杞憂に終わる。さすが、意識レベルの高い生徒たち(^_^)vひとりの遅刻もなく、いざ県立大学へ!!講義室に到着すると数人の学生たちが。あいさつもそこそこに着席すると、一様に緊張感が漂う。今日の講義体験は、人間生活学部こども学科2年生の講座「社会福祉援助技術：演習」でご担当は、植木信一准教授。事前に同准教授と打ち合わせした際に、「エンパワメントアプローチについて」ということを聞かされていた私は一応予備知識を得て、講義に臨んだのではあったが……!!



先生はやおら竹とんぼを取り出し、飛ばしてみせる。(なかなかよく飛ぶ竹とんぼで、学生たちからは「ウォーッ」と感嘆の声。かくいう私も感嘆の声をあげたのは言うまでもない。) 確か、今日は「エンパワメントアプローチ」が講義のテーマだったはずだが……、などと思っていると次はポケットからケン玉が登場。先生の技が冴え渡る。そこで先生はこうおっしゃった。「自分で関わったもの(自分で作ったもの)が予想以上の反応を示す(竹とんぼの例から)。これが保育でいうところの『遊び』なのです。」と。



そして、東日本大震災で被災された避難所でのボランティア活動を例に引き説明がはじまった。避難者の不安をどのように解消していくか。特に子どもたちは避難所では静かにしなさいと大人から言われ、ストレスを抱えている。そして、自分が悪いのではないかと考える。つまり、子どもたちは、大人の顔色を見ながら判断し、行動していたのです、と。それでケン玉だったのです。そして光るドロ団子(不覚にも私はどういうものを指すのか、まったくイメージが湧かなかった)の例を出され、大人の目線と子どもの目線の違いを認識しなければならないということを教えていただいた。そして、「遊びを導入することによって、震災で押し込められた子ども本来が持っている力を回復させる。こう考えてくると、保育とは与えることではなく、子どもたちが本来持っている力を引き出す。これがエンパワメントアプローチです。」と。

「なるほど!そういうことだったのか(^_-)」 妙に納得させられてしまった自分がそこにいた。

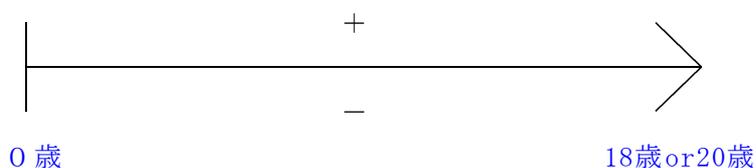


次に、全員を6班に分け、10年後の自分をイメージして配付した紙に漢字1文字で表現し、それぞれが何故その文字を記したか、その理由を述べてみようという指示された。その後、各班では活発なそれぞれの自己紹介がなされる。(各人それぞれに10年後のあることが分かる。)



続いて、私の人生曲線を描いてみようという指示。はてさて各人どのような曲線ができるか？お楽しみ～(^_^;)

皆が描き終わった頃を見計らい一番どん底のところをA、曲線の上がったところをBとすると



AからBに上昇していった時に、どのような人との出会い、関わりがあったか考え、発表してみようとの指示。「なるほど～。ウン、ウン。」と頷きながら、心中ではこれがエンパワーメントアプローチなんだろうなあ、な～んて思いながら聞いていると、これがご明算。



そこからいよいよエンディングに突入していく。

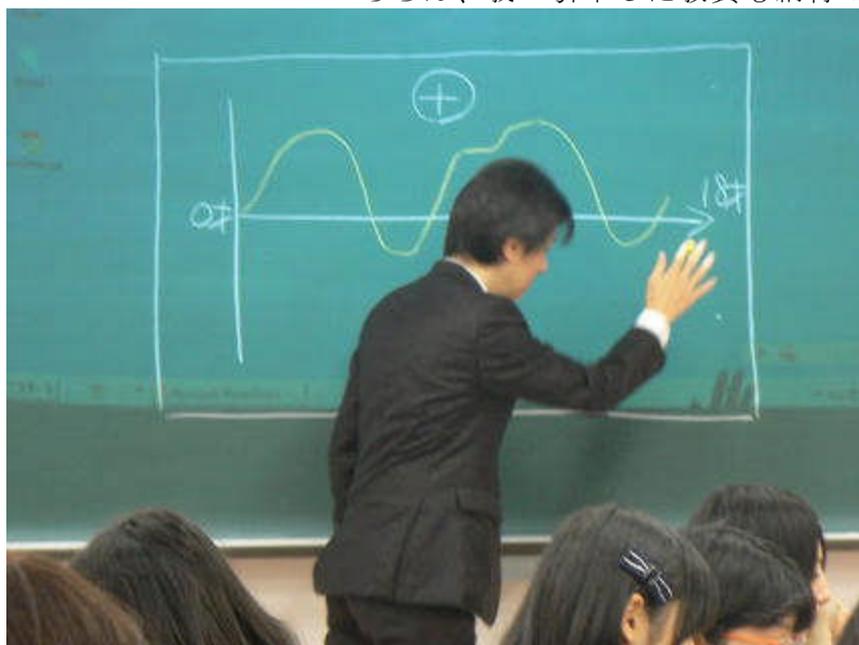
先生は、「**人それぞれ曲線は違うが、必ずA点とB点があり、上昇するためには人との関わりが最も重要である。**」と説く。さらには、「**見通しを持った意図的な関わり(フロの仕事)、これこそが「社会福祉援助技術」なのだ。保育士の仕事は、子ども本来が持つ力を取り戻させ、その子に合った援助をすることだ。**」と。

講義を受講した学生や本高生はもちろん、我々引率した教員も納得の

解であった。

そして、「**人間の発達には必ず回り道をする。後戻りしているような時点がある。それを克服すると次のステージがあり、自分の力だけで克服できればOKだが、皆がそうだったようにそこに他者が関わっている。**」と。

平生は、そんなこと考えもしなかったのに自分の過去を振り返り、その際の関わりについて改めて気づかせてくれた先生



に感謝申し上げたい。たぶん、そこにいた皆がそう感じたに相違ない。

最後に先生は、「自立＝自分自身の考え、思いを正確に伝える力をつけること。そのために勉強するのだ。」とおっしゃられた。ほんとにその通りだと痛感させられたとともに、本当に集中でき、心の底から楽しんだ90分間であった。

「あ～あ、大学時代に戻りたいなあ。もう無理だけど。」

この広報は、新潟北高等学校ホームページ

http://www.niigataki-h.nein.ed.jp/gakkou/top_gakkou.htmlにも掲載しています。